

訪問 **ほっ** とらいん

被災地の学生ボランティア

本誌編集室

こぶし園近くの空き地に立つ2階建てのプレハブ住宅。ここには、東北福祉大学(仙台市)の学生が活動と生活の拠点にしている災害復旧支援本部がある。同大学は、阪神淡路大震災や原油流出事故でも支援を行った実績があり、2004年11月8日～12月27日までの約2か月間、5班(1班あたり約25名)が10日間ずつ順次入れ替わりながら、長岡市内でさまざまなボランティア活動に携わっている。

●生活の場を自ら確保

復旧を支援するボランティアも生活をする必要がある。そこで、彼らはプレハブ住宅の資材を持ち込んで組み立て、生活に必要な用具一式を

持参した。そこで自炊をしながら寝泊りするため、現地で調達するのは水と電気だけである。生活の場を自ら確保したことで、被災地に負担をかけることなく、長期の支援が可能となった。

●ボランティア活動の実際

ボランティア内容は、倒壊家屋の片づけ、避難所での配膳作業、高齢者の話し相手、移動介助、緊急入所者であふれる施設への助っ人など多岐に渡る。介護課程を学んでいる学生は、介助技術が必要な支援を担当し、体育会系の部活に所属している学生は、レクリエーションや力仕事が必要な場面で活躍するなど、学生の適性にあわせて分担を決めてい

東北福祉大学の災害復旧支援本部



る。1日の活動を終わると、毎晩グループリーダーを中心にミーティングを行ない、支援の方向性を全員で確認している。

学生に同行している教員は、「第1の目的は社会貢献ですが、学生には自分の将来を考える機会となっている。派遣先や学生本人にアンケートをとり、活動の方向性を軌道修正しながら、次に来る班への引継ぎをしたい」と語った。